

## Cangoxina

— 世界史の中の島津斉彬・西郷隆盛 —

松尾千歳

### 1. Cangoxina

尚古集成館の松尾と申します。私どもの館は島津家の歴史・文化を紹介する歴史博物館です。その館長をしております。また、2018年のNHK大河ドラマ「西郷どん」が放送されていますが、これにも少し関わっています。

まず、「西郷どん」の放送が決まって間もない頃、NHKの方が尚古集成館を訪ねて来られました。西郷はすでに「翔ぶが如く」で取りあげている。「翔ぶが如く」とは違った視点で西郷を描きたい。また、「翔ぶが如く」の放送が1990年で、それから28年も経ち、幕末維新史の研究も進んでいる。こうしたこともドラマに反映させたいので協力してもらいたい、ドラマに使えるネタを提供してもらいたいとのことでした。それで関係資料やドラマに使えそうなネタ・エピソードなどをいくつか提供いたしました。



図1 メルカトルアジア図  
(神戸市立博物館蔵)

「Zipangri (日本)」の南端に「Cangoxina (カンゴシナ)」と書かれている。

提供したものはけっこう使っていただけました。その一つが、ドラマの第1話に登場した「Cangoxina」です。ドラマのキーワードとして使われています。ドラマでは簡略な世界地図の中に書かれた文字として登場しましたが、実際は1587年のメルカトルのアジア図に出てくるものです。この地図は神戸市立博物館にあります。尚古集成館から出版した『海洋国家薩摩』などの図録に掲載させてもらっており、その図録を脚本家の中園ミホさんやNHKの方にお渡ししていましたから、それが目にとまったのだと思います。

メルカトルのアジア図は、日本発見間もない頃に作成されたものです。まだ日本に関する情報があまりヨーロッパに伝わってなくて、日本の位置がやっと分かったという段階のものです。日本が一つの島として描かれています。ただおもしろいのは、日本から中国大陸に向かって点々と島が連なっている。沖縄や奄美の島々の様子がよくとらえられています。これはヨーロッパ人たちが中国南部から、沖縄や奄美の島々を伝って日本にやって来たということを示しています。また日本の町の名前が所々に書いてありますが「Bandu」「Negru」「Frafon」などと、どこ？日本の地名？というようなレベルのものばかりです。でも日本の南端には「Cangoxina」と書かれています。非常に早い段階から鹿児島が日本の南端、ヨーロッパ人たちにとって日本の入り口にある町として認識されていたことを物語っています。あと日本らしいのは上の方にある「Miaco（都）」くらいです。

では19世紀が舞台の「西郷どん」になぜこれが使われているのか。それは16世紀も19世紀も、鹿児島が南の玄関口、特にヨーロッパの関係において重要な所だったからです。

16世紀、ヨーロッパ人たちが中国南部から琉球・奄美の島を伝って日本へ到達しました。だから鉄砲伝来も、キリスト教伝来も舞台が南九州となります。長崎が外国の窓口というイメージが強いのですが、それは徳川幕府が鎖国体制下、長崎を外国の窓口と位置づけたからです。そういう風に位置づけられる以前は南九州も外国の窓口でした。それが鎖国令によって一変してしまったのです。しかし、19世紀になると復活します。幕府の指示に従うオランダの船は、琉球・薩摩を素通りして長崎に向かいましたが、植民地を求めてアジアに進出してきたイギリス・フラ

ンスは、幕府の指示など何とも思っていませんので、彼らの船は素通りいたしません。薩摩藩領の港に寄港し、軍事力をちらつかせて通商を迫ります。16世紀に鉄砲伝来・キリスト教伝来などの舞台が南九州だったように、19世紀の通商を迫る西欧列強との出会いの舞台も、日本の南端に位置する薩摩藩領となったのです。

1840年代、薩摩藩は他地域より早く通商を迫る西欧列強の激しい外圧にさらされました。このままでは日本が植民地化されるという危機感を強く抱いた薩摩藩は、それを阻止するために動き出しました。その動きを指揮し、日本が歩むべき道筋を指示したのが島津斉彬でした。そして西郷隆盛がその手足となって働き、斉彬の没後、西郷らが斉彬の遺志を受け継ぎ、日本を近代国家へと生まれ代変わらせたのです。

## 2. 海の道



図2 中世のおもな湊

帆船の時代、船はできるだけ陸地の近くを通って次の目的地を目指すというのが一般的でした。そうすると九州は海外交易の拠点となります。

まず博多や平戸などから壱岐・対馬などを経て中国・朝鮮へと伸びた

海上交易路が、日本と外国を結ぶ大動脈になります。それともう一つ、南九州からトカラや奄美・琉球等の島々を経由して中国大陸へと至る海上交易路で、これは一般に「海の道」「海上の道」と呼ばれています。

「海の道」の終着点である南九州の海には、海外へ向かう日本の船、海外から来航した外国船が数多く浮かんでいました。また各地に外国人居留地も形成されており、そのいくつかは今も地名にその名残をとどめています。鹿児島純心女子短期大学がある一帯・唐湊もその一つです。江戸時代に薩摩藩が編さんした『三国名勝図会』（巻七）という本に

唐渚（唐湊）府城の南 中村にあり、この所古へ海湾にして、唐土の来舶泊繋せるゆゑに、唐渚の名ありといひ伝ふと書かれています。今、唐湊は海から遠く離れていますが、かつては湾となっていて、そこに中国の船がたくさん停泊していた。だから唐湊というのだそうです。

実は、私は鹿児島大学に入学した際に唐湊に住んでいました。最初、「とそ」と読めなかったです。「からみなと?」「なぜ、とそ?」などと思っていました。そうしましたら、ある時、中国の方が「タンツォ」と読んだのです。どうも中国語の発音がなまって地名として受け継がれているみたいなのです。だから近くの「神田」も、普通だったら「かんだ」と読むのに「しんでん」と読み、谷山の「中山」も「なかやま」ではなく「ちゅうざん」と言うのかなと思ったりしています。

さて、日本と外国を結ぶ海上交易路は、博多や平戸など北部九州から延びたものと、南九州から延びたものとあったのですが、ヨーロッパとの関係を見てみますと、南から延びた海上交易路が重要になってきます。ヨーロッパ人たちが東南アジアから北上して中国・日本に迫ってきたからです。

15世紀、ヨーロッパは大航海時代という、ヨーロッパ人がアフリカやアメリカ大陸など世界各国へ羽ばたいた時代を迎えます。主役はポルトガルとスペインです。進出先でたびたび衝突した両国は、1494年、西経46度37分の経線より以東をポルトガルが、以西をスペインが支配するというトルデシリャス条約を締結しました。勝手に地球を真っ二つに分けて支配してしまおうというのです。

それで、東をもらったポルトガルは、アフリカにさしたる抵抗勢力が

なかったため順調に大西洋を南下し拠点を築いていきます。1498年にはバスコ＝ダ＝ガマが喜望峰をまわってインドのカリカットに到達し、1510年にはアルブケルケ率いるポルトガル艦隊がゴアを攻撃して占領しました。翌1511年にはアルブケルケの艦隊は東南アジアの要衝マラッカを占領、ここを拠点に東アジア・中国進出を図りました。

一方、西をもらったスペインは、南北に長いアメリカ大陸にぶち当たります。マゼラン海峡は比較的早く見つけられるのですが、アフリカの喜望峰よりはるかに南、南極に近いところにあり、海の難所でなかなか拠点を形成できません。苦勞して超えたと思ったら、今度は広大な太平洋が広がっていてやはり拠点が形成できず、スペインのアジア進出はポルトガルに後れをとりました。

一足先にアジアに到達したポルトガルは、1517-1522年にかけて明（中国）と接触し国交を結ぼうとしますが、中国皇帝を頂点とする世界秩序を築こうとしていた明はこれを受け入れませんでした。明にとって対等な外交関係などあり得なかったのです。それでポルトガル人たちは非法的な密貿易を行っている倭寇と手を組みます。そして倭寇に導かれ、「海の道」を伝って日本に迫り、種子島へ漂着、西欧人による日本発見となったのです。さらに1549年にはザビエルが鹿児島に上陸し、日本にキリスト教が伝えられました。こうして鹿児島がヨーロッパ人たちから日本の入り口にある町としていち早く認識され、ヨーロッパで作成された地図で、日本「Zipang」の南端に「Cangoxina」と書かれるようになります。

ちなみにザビエルは約2年間、日本に滞在しました。その前半約1年は鹿児島で暮らしています。日本でもっともザビエルと関係が深い町が鹿児島なのです。また日本について約3ヶ月後、宣教師仲間に状況を知らせる手紙を送っています。1549年11月5日付のザビエル書翰で、ゴアのイエズス会に宛てたものです。その中でザビエルは

この国の人びとは今までに発見された国民のなかで最高であり、日本人より優れている人びとは、異教徒のあいだでは見つけられないでしょう。彼らは親しみやすく、一般に善良で、悪意がありません。驚くほど名譽心の強い人びとで、他の何ものよりも名譽を重んじます。大部分の人びとは貧しいのですが、武士も、そうでない人びと

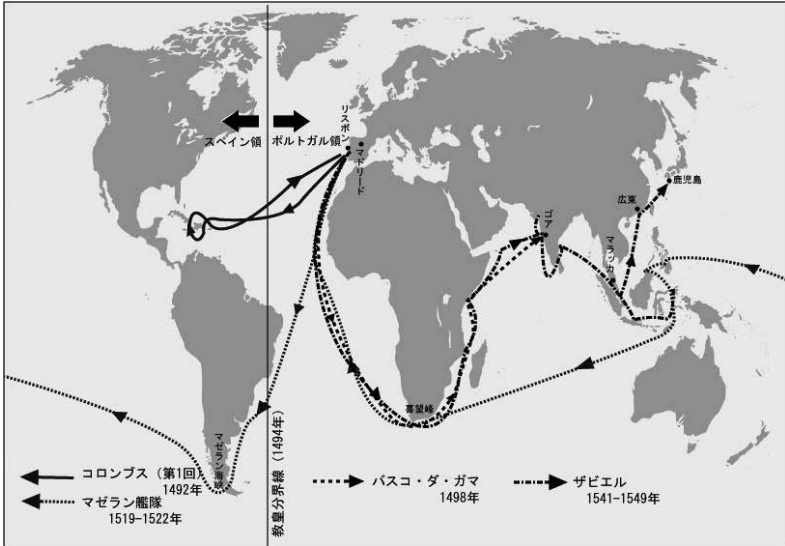


図3 ザビエルの足取り

も、貧しいことを不名誉とは思っていません。

と、日本人のことを絶賛しています。日本人が読むとうれしくなる記述なのでよく歴史の本などでも紹介されますが、この段階でザビエルは鹿児島以外のどこにも行っていません。日本=鹿児島なのです。すなわち、ザビエルが絶賛した日本人というのは鹿児島の人たちのことなのです。また

もし私たちが日本語を話すことができれば、多くの人びとが信者になることは疑いありません。主なる神は私たちが短い期間に〔日本語を〕覚えるならば、きっとお喜びくださるでしょう。私たちはすでに日本語が好きになりはじめ、四〇日間で神の十戒を説明できるくらいは覚えました。

ともあります。日本=鹿児島ですから、ザビエルは鹿児島弁を一所懸命に学んでしゃべっていたのです。

### 3. 西欧列強の日本進出と薩摩藩

16世紀、日本とヨーロッパの出会い、その初期段階は鹿児島が主な舞台でした。海外交易が非常に盛んな所だったのですが、17世紀、徳川幕

府の鎖国政策によって大打撃を被り、南九州の港から外国船が姿を消し、外国人居留地もなくなってしまいました。

しかし、19世紀になるとまた状況が変化してきます。産業革命が進展し、イギリス・フランスなど西欧列強が植民地を求めてアジアに進出してきたのです。当時、ヨーロッパと日本の軍事力にどれだけ差があったのか、嘉永6年（1853）に浦賀に来貢したペリー艦隊の旗艦サスケハナと、日本最強といわれていた將軍御座船天地丸を比較してみたいと思います。

まずサスケハナですが、木造フリゲートと言われるタイプの船で、1850年に完成したばかりの最新鋭艦でした。排水量3,824トンです。当時の記録には現在使われていないbm トンで記されていますが、これですと2,450bm トンとなっています。水線長、海面に接している長さですが、これは76メートルです。これに推定馬力420馬力の蒸気機関を搭載し、速力8ノット（時速約15キロ）で動くことができました。また大砲も9門搭載していました。

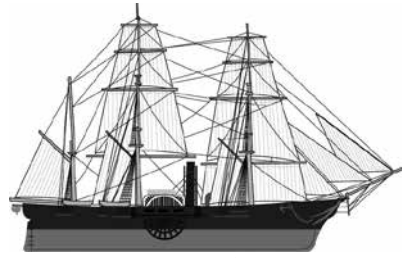


図4 サスケハナ

これに対し、天地丸は寛永7年（1630）に建造された関船というタイプの船です。実は徳川幕府は江戸時代の初めに大船建造禁止令というものを出しておりまして、大型の軍船・安宅船の所有を禁じました。中クラスの関船、小型の小早というタイプの船しか所有を認めませんでした。それも500石積以下しか所持してはならないと定めていたのです。500石積というのは米を500石積めるというものです。米500石というのは約75トン。基準が違いますが大きさは全く違います。天地丸も全長は34メートルほどしかありませんでした。また、戦国時代さながらの形・装備も維持させられていましたので、大砲は搭載していません。武器は火縄銃や弓矢です。幕府の軍船も大名たちが所持する軍船も、皆このようなものでした。東になっても黒船と戦うことができないような軍船しか日本にはなかったのです。

それから、そのペリーですけれども、太平洋を横断してアメリカから



図5 ペリーの足取り

浦賀に來航したわけではありません。ノーフォークというアメリカ東海岸の軍港を出港して大西洋を横断、ポルトガル沖のマディラ諸島から針路を南に転じてアフリカ大陸を周り、インド洋を通してシンガポールへ。シンガポールから北上し、香港・上海へ、そして薩摩藩領の那覇へ。那覇から浦賀に向かったのです。マディラ諸島から先は、16世紀のポルトガル人たちの進出コースとほぼ同じです。イギリスやフランスの船も、ペリーと似たようなコースで日本に迫ってきますので、19世紀の西欧列強との出会いの舞台も日本の南端に位置する薩摩藩領となったのです。

18世紀末から19世紀初頭、イギリス・フランスなど西欧列強の艦船が南から日本に迫ってきました。文政7年（1824）には大きなトラブルが薩摩藩領で発生します。宝島事件です。実は産業革命の進展とともにマシンオイルの需要が高まっていました。当時のマシンオイルは石油製品ではなく鯨油でした。ヨーロッパ人たちは鯨油を求めて太平洋に進出していました。宝島に來航したのも捕鯨船だと思います。今みたいに冷凍設備などありませんから、長い航海中はろくなものが食べられない。そのような中、宝島に牛がいるのを見て、牛肉を食べたくなったようで、船員たちが島に上陸して島役人に牛をよこせと要求しました。島役人が





図6 西欧船の日本進出

これを断ると銃撃を浴びせ、牛を強奪。島役人がこれに反撃して船員1名を射殺しています。これが宝島事件です。

この事件は幕府に報告され、これが一つの要因となって、翌文政8年に幕府が外国船は見つけ次第打ち払えという「無二念打払令（異国船打払令）」を出します。そしてこの法令が実行される事件もまた薩摩藩領でおこりました。天保8年（1837）のモリソン号事件です。これはアメリカ船モリソン号が引き起こしたのですが、日本人漂流民を送り届け、平和的に通商を求めようとしていました。最初に浦賀に来航したのですが、無二念打払令に基づき浦賀奉行所が砲撃を加えてきたので退去しました。この船は中国から出港していたので、戻る途中にもう一度やってみようと鹿児島湾の入り口である山川に来航したのです。薩摩藩も幕命に従いモリソン号に砲撃を加え追い払いました。

それから1840年に中国でアヘン戦争がはじまりました。アジア最大・最強と目されていた中国が西欧の島国イギリスに完敗。1842年に香港割譲などを認めた南京条約を押し付けられて、植民地化の道を歩み始めました。この中国の敗戦は日本へも伝えられ、西欧列強のアジア進出に対する警戒感が一層高まりました。ただ、日本の他地域はまだどこか他人

事のような雰囲気でした。しかし、薩摩藩には植民地化の危機が現実問題として降りかかってきたのです。

まずアヘン戦争が終わった翌年、天保14年（1843）に琉球国の宮古・八重山にイギリスの測量艦が来航し、兵員を上陸させて測量を強行していきました。この時、琉球王府の役人が、イギリス側に勝手に兵員を上陸させてもらっては困ると抗議しているのですが、イギリス側はイギリス国王の命令であると称して測量を強行しています。薩摩藩・琉球王府の主権は踏みにじられたのです。さらに翌弘化元年（1844）にはフランス軍艦が、弘化2年イギリスの測量艦が、同3年にはフランスのイシンドシナ艦隊（クレオパトラ他）と、毎年のようにイギリス・フランスの軍艦が琉球に来航して通商を求め、薩摩藩・琉球王府はその対応に追われました。

宝島事件やモリソン号事件は、民間レベルでのトラブル・圧力でしたが、今度は国家レベルの圧力です。危機の度合いが違います。薩摩藩も軍事力の差が歴然としていることを認識し、強い危機感を抱くようになっていました。例えば、琉球に外国船が来航したことを幕府に報告すると、幕府からは琉球に兵隊を送って守りを固めるように命令がでます。薩摩藩は兵を送りましたと幕府に報告していますが、実際には派遣していません。その理由が琉球王府に送られた指令書に書かれています。弘化元年8月に出された「従大和下状」（大和よりの下状）です。それには

右（薩摩）の勢差し越しあい防ぎ候はば、たとえば三・四歳の童子を以て相撲取などえ相手いたさせ候も同然にて（略）至極穩便に取り計らい、少も武器を動かさず、異国人どもの申出の機変に応じ、弁話を以て申し諭し候ように

と、薩摩の兵隊を派遣しても、先頭になれば3、4歳の子供が相撲取りに相撲を挑むようなものなので絶対に勝てない。とにかく穩便に取り計らい、武器を使うようなことはせずに、外国人の話に合わせて交渉し、出帆するように諭せというのです。

そして、西欧諸国との軍事力の差を早く縮めないといへんなことになると、西欧の科学技術を導入して近代化・工業化を図ります。

当時の薩摩藩主は島津斉興、斉彬の父親です。斉興は弘化3年に、城

下向築地、今の石橋公園がある辺りに鑄製方（いせいほう）という、青銅製の洋式砲を造る工場を創設しました。山川や佐多・根占・鹿兒島・枕崎など海岸部要衝に砲台を築いて、鑄製方で製造した大砲を配備し、防衛体制を固めました。さらに理化学薬品の研究・製造をおこなう中村製薬所の創設や、滝之上火薬製造所を洋式に改めるなどの改革もおこないました。

#### 4. 島津斉彬の登場

斉興たちの近代化事業は、全国的に見ても早く、また規模も大きいものでした。日本の近代化は、長崎防衛を担っていた佐賀藩と、いち早く外圧にさらされた薩摩藩がリードしていく形で始まりました。

ただ、薩摩藩の世子（跡継）はこれでは不十分だと考えていました。青銅砲ではなく鉄製砲が必要だとか、軍艦もいる。紡績などの産業も興さないといけない。また西欧列強への対処は、薩摩藩だけでできるものではない。幕府や他藩と情報を共有して日本が一丸となって対処しなければならないと考えていたのです。父の斉興は、そんなことをすれば藩の財政が破綻する。藩の秘密が幕府・他藩に漏れると斉彬の考えを危険視しました。このため斉彬に家督を譲ることをためらいました。

また、斉興はイギリスやアメリカ政府の高官を呪詛させていました。呪いの力で琉球外交問題の解決を図っていたのです。これがなぜか、斉興の側室・お遊羅の方が、我が子久光を藩主にするため斉彬と斉彬の子供たちを呪っているという噂となって広まりました。運悪く斉彬の子供が死去。噂は真実だと思った斉彬の支持者たちが暴走し、お遊羅らの暗殺を口走るようになりました。嘉永2年（1849）にこれが露見し、お遊羅騒動といわれるお家騒動へと発展しました。50人余りが切腹や遠島などに処されています。切腹させられた人の中に、西郷隆盛の父が出入りしていた日置島津家の赤山鞆負がいます。大久保利通の父利世も喜界島に流罪となっています。このため西郷らはお遊羅や久光に悪い印象を抱いてしまいました。それが後々尾を引くことになります。

それはさておき、嘉永4年、このお家騒動に幕府が関与し斉彬が薩摩藩主に就任しました。斉彬は日本を西欧列強から植民地化されないような国に生まれ代わらせようと動き始めます。斉彬がどのようなことを考

えていたか見てみたいと思います。

ちょっと後の史料になりますが、亡くなる2ヶ月前、安政5年（1858）5月28日付で斉彬が幕府に出した建白書です。外圧に悩み、その対処方法を考え続けていた斉彬がたどり着いた答えが、この建白書に凝縮されていると思っていますので、まずこれを紹介したいと思います。

当時（現在）外寇攻守の具は第一に大砲・砲台あるいは堅牢の軍艦など十分にこれなく候ては、夷狄（外国人の蔑称）とは申しながら当時戦闘に取り馴れ戎器（兵器）を巧制にいたし、航海などにも熟練の者どもごぞ候えば、御必勝の算いかがこれあるべきや（略）第一に人の和、繼いで諸御手当を精実にし残すところなく御行き届きこれなく候ては、皇国の御守護の御奉職を整えなされがたき世態にごぞ候（略）富国強兵の基を植しなされ、上下一同嘗胆（がまん）の憶を成し、外寇制御（侵略を防ぐ）の設十分に整えられたく（略）

ペリー来航後、日本は開国か攘夷かをめぐって紛糾いたしました。攘夷の「攘」は打ち払うという意味です。「夷」は外国人をさげすんだ言い方です。幕閣にも攘夷派がたくさんいましたので、まずこれを認めるようなことを書いていますが、その後、もし西欧列強と戦争になれば、必要な物は砲台と砲台、そして軍艦だと。日本にはこれらが無い。その状態で勝てますかと訴えています。配慮する必要のない家臣に当たった書状、安政5年4月9日付の早川五郎兵衛宛の書状では、攘夷論のことを「無謀の大和たましいの議論」と記しています。これが斉彬の本心です。

そして、大砲や砲台・軍艦をそろえて防衛体制を固める必要性を唱えています。それよりも「第一人の和」が大切で「富国強兵策」を採るようにと提案しています。その人の和ですが、斉彬の側近であった市来四郎は、『斉彬公御言行録』で斉彬が

政事は人気一致を肝要とす、國中末々の者ども困窮せず、豊かなるを本とす、豊かなれば、人気自ら一致し、命令行われ、何より堅固の城郭なり、否らざれば必ず亡ぶに至る

と、人々に豊かな暮らしを保障すれば人の和が生まれる。人の和が日本を守る城となるのだと言っていたと記しています。ペリー来航後、日本各地で近代化・工業化が本格化し始めますが、幕府や他藩の事業は大砲鑄造や軍艦建造など軍事関係のものばかりでした。いわゆる強兵策で

す。これに対し、人々に豊かな暮らしを保証するために斉彬が取り組んだ集成館事業では、大砲製造や軍艦建造も行われますが、薩摩切子のような美術工芸品を生み出したガラス事業をはじめ紡績業・出版事業・食品事業・ガス・電信・医薬など産業の育成、社会基盤整備にも力が注がれました。富国強兵策です。斉彬は「国家の蔵にいかほど金銀を積み重ねても富国にはなれない」「国住の者たちがみな豊かに暮らしている国が富国だ」と言っています。

富国強兵の考えは寺島宗則や大久保利通らが受け継ぎ、明治政府のスローガンとなりました。明治政府は軍備の強化もおこないますが、それ以上に殖産興業政策で産業の育成を図り、文明開化の名のもとに交通網の整備や教育・医療体制の充実など社会基盤の整備に力を注いでいます。まさに斉彬がおこなおうとしていたものでした。

また、イギリス製の地球儀やドイツ製の世界地図を持っていた斉彬は、西欧列強がいかにか広大な地域を支配しているか、また日本がいかにか小さな国かを知っていました。市来は斉彬が

日本一致一体の兵備にあらざれば、外国に対当することかなうまじく、公議も諸大名もこれまで一国一郡くらの心得にては、日本国の守護は調うまじく

と、幕府や藩という枠を越えて、日本が一丸となってイギリスやフランスなどの国々に対処すべきと主張したと記しています。日本が一丸となって対処するというのは、現代の我々は理解できます。しかし斉彬の時代は幕府や藩レベルが国家なのです。幕府や藩はそれぞれ独立した行政組織と軍隊を持っていました。斉彬の考えを今に置き換えると、宇宙からの侵略に備えて、地球上の国が一つにまとまって体制を整えよと言っているようなものなのです。実現は困難を極めました。

斉彬はこの考えを実現させるために公武合体を推進します。朝廷・幕府・大名らによる挙国一致体制を築こうとしたのです。そして中核となる幕府にはしっかりしてもらいたい、将軍には強いリーダーシップを発揮してもらいたいと考えていました。しかし、将軍徳川家定は病弱、将軍としての役割を果たせず、政治が滞って幕閣・諸大名たちは困ります。そこで早く将軍の跡継ぎを決めて、その跡継ぎに実質的な将軍の役割を果たしてもらおうという意見が出ました。慣例に従えば家定の従兄弟に

当たる紀州藩主の徳川慶福（のちの家茂）がふさわしかったのですが、跡継ぎ問題が本格化する安政3年段階ではまだ11歳と幼く、老中阿部正弘や福井藩主松平慶永、そして斉彬らが、今は血筋だのいっている場合ではないと、一橋家の徳川慶喜を推しました。これに譜代大名の井伊直弼や大奥が反発、あくまでも血筋を重視すべきと譲らず、慶喜を推す一橋派と、慶福を推す南紀派が激しく対立することになりました。

斉彬は慶喜擁立のため、京都の近衛忠熙、老中阿部正弘・前水戸藩主徳川斉昭・福井藩主松平慶永らと連絡を取り合って工作をおこないます。その際、斉彬の手足となって活躍したのが西郷隆盛でした。

## 5. 斉彬の遺志継承

安政5年（1858）に紀州藩主の慶福を推す井伊が大老に就任し、次期将軍は慶福と定まりました。井伊は一橋派の公家・大名・志士らを弾圧し始めます。安政の大獄です。そしてその直後に家定が病没、慶福改め家茂が14代将軍に就任しました。さらに斉彬も病没します。斉彬も病没していなければ隠居などを命じられていたと思います。

斉彬の手足となって行動していた西郷も、幕府から追われる身になりました。その西郷が京都から月照という僧侶を連れてきました。月照も幕府から追われる身となっていたため、藩に保護を頼んだのですが、藩がこれを拒否したため失望し、月照とともに錦江湾に身を投げました。月照は死亡。西郷は一命を取り留め、藩から奄美大島に潜居せよと命じられ、奄美大島に渡りました。そして文久2年（1862）に呼び戻され、斉彬の弟・島津久光の出府に従うように命じられるのですが、久光の下関に先行して待っているという命令と、攘夷派に接触するなという命令、この二つの命令を破って久光を激怒させ、沖永良部島に流されます。今度は罪人としてです。元治元年（1864）に許されて上京し、禁門の変、それに続く長州出兵や薩長同盟締結、そして戊辰戦争等で活躍いたします。

さて、斉彬が急死した後の西郷の動き、薩摩藩の動きはわかりにくいです。

まず斉彬は、幕府を中核とした挙国一致体制を築くために、公武合体の実現を目指していました。遺志を受け継いだ弟の久光は、文久2年に

安政の大獄で失脚していた徳川慶喜らを政治の表舞台に復活させます。また翌文久3年には、薩摩藩は会津藩とともに、攘夷の即時実行を主張して幕府に批判的な長州藩と公家を京都から追放します（八月十八日の政変）。そして元治元年（1864）これに反発した長州藩が京都に兵を進めると、やはり会津藩らとともにこれを撃退していま

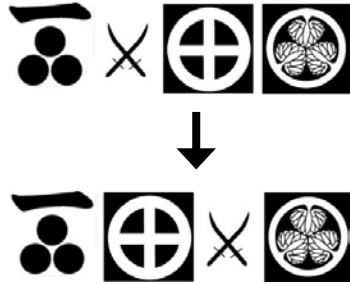


図7 幕府と薩摩藩との関係

す。そうかと思えば、慶応2年（1866）には敵対していた長州藩と同盟（薩長同盟）を締結し、助けていたはずの幕府を倒してしまう。薩摩藩は揺れ動いているように見えてしまいます。

これは国内情勢だけを追っているからです。外国との関係をからめてみると、薩摩藩の方針は一貫しており、ぶれていないことが理解していただけると思います。

斉彬没後、島津久光、西郷隆盛・大久保利通ら薩摩藩首脳が目指したのは、斉彬の遺志を継承し、実現させることでした。それは西欧列強から植民地化されないように挙国一致体制を築き、日本を強く豊かな国に生まれ変わらせるというものです。当初は幕府を中核とした新しい体制作りを目指していましたので、文久2年に出府した久光は幕府に改革を迫り、安政の大獄で失脚した徳川慶喜等を復権させたのです。

長州藩と戦ったのは、長州藩の攘夷論を危険視したからです。斉彬は攘夷を無謀といっています。久光も同じ考えです。へたに攘夷をおこなえば西欧列強と戦争になる。日本は負けて植民地化の道を歩む。また戦争になれば西欧列強は長州・薩摩だの区別せずに日本を攻めてくる。そうすれば薩摩も巻き込まれてしまう。だから力尽くでも長州藩の攘夷実行を押さえ込んだのです。

ただ、薩摩藩士がイギリス人を殺傷した生麦事件と、それに続く薩英戦争で薩摩藩はイギリスと戦火を交えましたので、薩摩藩も攘夷派だったのではと誤解されます。しかし生麦事件でイギリス人を切った武士は、現在で言う SP やシークレットサービスのような存在で、久光を護衛していました。目の前に不審な外国人が現れ、制止を無視して久光に

近づいてきました。彼らは久光に危害を加える可能性があるとは判断し、任務をまっとうするために斬りつけたのです。攘夷派によるテロ行為とは違います。イギリス側も最初は攘夷派のテロ行為とみなしたため薩英戦争となったのですが、戦争が終わった直後に出されたイギリス側の新聞に、生麦事件は殺傷されたイギリス人たちが傲慢で、東海道に出ないようにという指示および、薩摩の武士の指示を無視したことが原因だと記されています。イギリス側も薩摩藩が攘夷派ではないと理解したから、戦後、急速に両者の関係が改善したのです。

さて、徳川との関係ですが、文久3年の八月十八日の政変後、京都で公武合体派による参与会議が開催されることになりました。しかし、元治元年になると、徳川慶喜が徳川の独裁体制を維持しようとする考えが明らかになり、慶喜がいるかぎり公武合体の実現は不可能という状況に陥りました。薩摩藩にとって徳川は協力すべき相手から排除すべき相手へと代わり始めたのです。禁門の変では、薩摩藩はまだなんとか徳川方に踏みとどまっていた状態だったのです。

一方、禁門の変で破れた長州藩ですが、その直後にイギリス・フランス・オランダ・アメリカの四ヶ国艦隊から攻撃されます。長州藩が関門海峡を通過する外国船を攻撃してため、その報復攻撃を受けたのです。長州藩は大敗し、諸外国から攘夷放棄を迫られこれを受け入れました。薩摩藩が長州藩と戦っていたのは、長州藩が攘夷を実行しようとしていたからです。長州藩が放棄したのであれば、戦う必要性はなくなります。徳川を見限っていた薩摩藩は、長州藩と手を組んで挙国一致体制を構築することとし、明治維新を断行して日本を近代国家へ生まれ変わらせたのです。

このように、幕末の薩摩藩の動きは、国内情勢だけを見ていると誤解されます。外国との関係を追わないと真の姿は見えてこないのです。ですから大河ドラマ「西郷どん」では、外国との関係を追ったストーリー展開にするということで、「Cangoxina」がキーワードになっているのだと思います。

(尚古集成館館長)